

経済産業省

20160401商局第1号

電気関係報告規則第3条の運用について（内規）の一部を改正する規程を次のとおり定める。

平成28年4月1日

経済産業省大臣官房商務流通保安審議官 住田 孝之



電気関係報告規則第3条の運用について（内規）の一部を改正する規程

電気関係報告規則第3条の運用について（内規）（20120919商局第9号）の一部を別紙の新旧対照表のとおり改正する。

附 則

- 1 この規程は、平成28年4月1日から施行する。
- 2 この規程の施行の日の前に発生を知った事故に係る運用については、なお従前の例による。ただし、この規程の施行の日の前に発生し、施行の日以降に電気関係報告規則（昭和40年通商産業省令第54号）第3条第1項第6号に掲げる発電支障事故に該当することとなった事故については、この限りでない。

○電気関係報告規則第3条の運用について（内規）（20120919商局第9号） 新旧対照表

（傍線部分は改正部分）

改正案	現 行
<p style="text-align: right;"> <u>20120919商局第9号</u> <u>平成24年9月19日</u> 改正 <u>20160401商局第1号</u> <u>平成28年4月1日</u> </p> <p style="text-align: center;">電気関係報告規則第3条の運用について（内規）</p> <p style="text-align: center;"> <u>経済産業省大臣官房商務流通保安審議官</u> </p> <p> <u>電気関係報告規則（昭和40年通商産業省令第54号。以下「規則」という。）</u> <u>第3条は、電気事業法（昭和39年法律第170号。以下「法」という。）第10</u> <u>6条の規定に基づき、事業用電気工作物において、感電等による死傷、電気火</u> <u>災、主要電気工作物の破損、供給支障、ダムによって貯留された流水の異常放</u> <u>流、その他社会的影響を大きい事故が発生したとき、その施設を管理する電気事</u> <u>業者（法第38条第4項各号に掲げる事業を営む者に限る。以下同じ。）又は法第</u> <u>38条第4項に規定する自家用電気工作物を設置する者（以下「自家用電気工作</u> <u>物設置者」という。）に対し、経済産業大臣又は電気工作物の設置の場所を管轄す</u> <u>る産業保安監督部長に電気事故に関する報告義務を課すとともに、その報告の範</u> </p>	<p style="text-align: center;">電気関係報告規則第3条の運用について（内規）</p> <p style="text-align: right;"> <u>平成24年9月19日</u> <u>商務流通保安グループ</u> </p> <p style="text-align: center;">（新設）</p>

改正案	現 行
<p><u>囲、方法等について定めている。</u></p> <p><u>本規程は、規則第3条に基づく報告が適切になされるよう、報告の目的、範囲、方法等について詳細に定めたものであり、電気事業者又は自家用電気工作物設置者は、本規程に基づいて報告を行うこととする。</u></p> <p><u>目次</u></p> <p><u>1. 電気事故報告の目的</u></p> <p><u>2. 規則第3条の運用に当たっての留意点</u></p> <p><u>3. 報告基準の各号について</u></p> <p><u>附則</u></p> <p><u>1. 電気事故報告の目的</u></p> <p><u>電気事故報告は、電気に係る保安の確保のために欠くことができないものであり、その内容の分析に基づいて、類似の事故の再発防止策を講じるとともに、電気工作物の安全性の確保、信頼性の向上等のための施策の検討を行う。</u></p> <p><u>また、本報告によって、電気工作物の施設、保守及び給電サービスの状況を明らかにし、電気に係る保安の確保のための規制の在り方について検討することが可能となる。</u></p> <p><u>電気事故の分析は、ミクロ的分析とマクロ的分析の両面から行う必要がある。本報告はミクロ的分析に該当し、社会的及び技術的に重要であり、他の設備についても予防措置を講じる必要があるものや、最新の技術を用いた設備で発生した事故であって詳細に調査をする必要のあるものについて、報告を求め</u></p>	<p>(新設)</p> <p>(新設)</p>

改正案	現 行
<p><u>るものである。なお、「定期報告（規則第2条の規定に基づく電気保安年報）」はマクロ的分析に該当する。</u></p> <p><u>上記のとおり、本報告と定期報告は、電気技術の進歩と電気産業の発展に必要な不可欠な資料である。</u></p> <p>2. <u>規則第3条の運用に当たっての留意点</u></p> <p>(1) <u>規則第3条第1項の表第4号、第5号及び第6号は電気工作物の使用が開始された時から適用し、その他の同条同項の規定については、電気工作物の設置又は変更の工事が開始された時から適用する。</u></p> <p>(2) <u>電気事業者又は自家用電気工作物設置者は、規則第3条第1項各号の<u>少なくともいずれかの事故に該当するときはその旨を直ちに報告する必要がある。</u>同条第2項に規定する「事故の発生を知った時」とは、電気事業者又は自家用電気工作物設置者が事象の発生を<u>覚知し、当該事象が規則第3条第1項各号の少なくともいずれかの事故に該当することを確認した時</u>のことをいう。</u></p> <p><u>また、規則第3条第2項前段の規定に基づく報告（以下「速報」という。）の際に、複数の号に該当する場合は、より適確に該当すると判断する号により報告することとし、速報の後に他の号に該当することが明らかになった場合は、その旨を規則第3条第2項後段の規定に基づき、規則様式第11によ</u></p>	<p>現 行</p> <p>1. <u>電気関係報告規則第3条の運用に当たっての留意点</u></p> <p>(1) <u>電気関係報告規則（以下「規則」という。）第3条第1項の表第4号及び5号は電気工作物の使用が開始された時から適用し、その他の同条同項の規定については、電気工作物の設置又は変更の工事が開始された時から適用する。</u></p> <p>(2) <u>電気事業者又は自家用電気工作物を設置する者（以下「自家用電気工作物設置者」という。）は、規則第3条第1項の表各号の<u>一に該当するときはその旨を直ちに報告する必要がある。</u>同条第2項に規定する「事故の発生を知った時」とは、電気事業者又は自家用電気工作物設置者が事象の発生した時から可能な限り速やかに当該事象の評価を行った時</u>のことをいう。</p> <p><u>なお、複数の号に該当する場合は、より適確に該当すると判断する号により報告するものとする。</u></p>

改正案	現 行
<p><u>り提出する「電気関係事故報告」(以下「詳報」という。)に、該当する号を全て記載して報告することとする。</u></p> <p>(3) <u>詳報は、事象の状況に関する事実関係とその発生原因(発生メカニズムを含む。)、再発防止のための対策等を可能な限り詳細に記載し、「事故の発生を知った日(電気事業者又は自家用電気工作物設置者が事象の発生を覚知し、当該事象が規則第3条第1項各号の少なくともいずれかの一の事故に該当することを確認した日をいう。)」から起算して30日以内に提出しなければならない。詳報により得られたデータは、事故分析等を通じ、それ以降の保安規制上の要求事項の改正や、他施設での同種の事故の発生防止策の検討等にも活用する。</u></p> <p>なお、<u>詳報</u>が提出された時点において、未だ調査中の内容が有る場合には、<u>当該詳報は中間報告と位置付け、調査結果が明らかになり次第、速やかに続報又は最終報を報告することとする。</u></p> <p>(削る)</p> <p><u>(4) 規則第3条第1項各号に掲げる事故以外の事故であって再発防止策の検討を要するなど、特に必要な場合は、法第106条に基づいて報告徴収を行うこととする。</u></p>	<p>(3) <u>規則様式第12に定める「電気関係事故報告」(以下「当該報告書」という。)は、事象の状況に関する事実関係とその発生原因、再発防止のための対策等を可能な限り詳細に記載し、「事故の発生を知った日」から起算して30日以内に提出することとする。当該報告書により得られたデータは、それ以降の技術基準の改正、他施設での同種事故の発生防止にも有益な情報と成り得るものである。</u></p> <p>なお、<u>当該報告書</u>が提出された時点において、未だ調査中の内容が有る場合には、調査結果が明らかになり次第、速やかに報告することとする。</p> <p><u>(4) 規則第3条第1項に規定する「原子力発電工作物」とは、電気事業法(以下「法」という。)第106条第1項に規定する原子力を原動力とする発電用の電気工作物をいう。</u></p> <p>(新設)</p>

改正案	現 行
<p data-bbox="85 268 443 296">3. 報告基準の各号について</p> <p data-bbox="107 379 819 408">規則第3条第1項の各号について、次のとおり<u>解釈</u>する。</p> <p data-bbox="91 491 752 520">【第1項第1号】<u>感電等の電気工作物に係る死傷事故</u></p> <div data-bbox="91 536 1111 705" style="border: 1px solid black; padding: 5px;"> <p data-bbox="114 552 1099 689">一 感電又は<u>電気工作物の破損</u>若しくは<u>電気工作物の誤操作</u>若しくは<u>電気工作物を操作しないことにより人が死傷した事故</u>（死亡又は病院若しくは診療所に入院した場合に限る。）</p> </div> <p data-bbox="125 721 250 750">(1) 目的</p> <p data-bbox="136 775 1122 865"><u>感電等のその他電気工作物に係る死傷事故は、法目的である「公共安全の確保」の観点から重要なものであることから、報告を求めるものである。</u></p> <p data-bbox="125 944 416 973">(2) 語句・文章の解釈</p> <p data-bbox="147 999 1122 1311">① 「<u>感電により人が死傷した事故</u>」：<u>充電している電気工作物や、当該箇所からの漏電又は誘導によって充電された工作物等に体が触れたり、あるいは電気工作物に接近して閃絡を起こしたりすることで、体内に電流が流れ、又は、アークが発生し、直接それが原因で死傷（アークによる火傷等も含む。）した事故又は電撃のショックで心臓麻痺を起こしたり、体の自由を失って高所から墜落したりすることなどにより死傷した事故をいう。</u></p> <p data-bbox="136 1337 215 1366">(削る)</p>	<p data-bbox="1137 268 1496 296">2. 報告基準の各号について</p> <p data-bbox="1160 379 1872 408">規則第3条第1項の各号について、次のとおり<u>解説</u>する。</p> <p data-bbox="1144 491 1346 520">【第1項第1号】</p> <div data-bbox="1144 536 2163 705" style="border: 1px solid black; padding: 5px;"> <p data-bbox="1167 552 2152 689">一 感電又は<u>破損事故</u>若しくは<u>電気工作物の誤操作</u>若しくは<u>電気工作物を操作しないことにより人が死傷した事故</u>（死亡又は病院若しくは診療所に<u>治療のため</u>入院した場合に限る。）</p> </div> <p data-bbox="1178 721 1303 750">(1) 目的</p> <p data-bbox="1189 775 2163 865"><u>感電その他電気工作物に係る人身の死傷事故は社会的な影響が大きいことから、報告を求めるものである。</u></p> <p data-bbox="1178 944 1469 973">(2) 語句・文章の解釈</p> <p data-bbox="1189 999 1267 1027">(新設)</p> <p data-bbox="1189 1337 2163 1426">① 「<u>破損事故</u>」：<u>電気工作物の変形、損傷若しくは破壊、火災又は絶縁劣化若しくは絶縁破壊が原因で、当該電気工作物の機能が低下又は喪失した</u></p>

改正案	現 行
<p>② 「誤操作若しくは操作しないこと」：<u>主として、電気工作物の操作員のヒューマンエラーによる事故の発生を想定し、「誤操作」とは、機器の操作手順書等に記載されている本来の当該機器の操作手順と異なる操作を行うことをいう。「操作しないこと」とは、例えば機器の誤動作阻止のための操作をしないことや点検後の復旧作業において規定の手順どおりなされていない状態のままにしておくなど、本来機器があるべき状態に操作しないことをいう。ただし、単に、操作員のヒューマンエラーに起因するものだけでなく、</u></p>	<p><u>ことにより、直ちに、その運転が停止し、若しくはその運転を停止しなければならなくなる</u>こと又はその使用が不可能となり、若しくはその使用を中止することをいう（第1条第2項第3号）。</p> <p><u>「直ちに、その運転が停止し、若しくはその運転を停止しなければならなくなること」とは、例えば電気工作物の機能低下の傾向が、通常運転において想定されている機能低下の範囲を超え急激である場合であって、当該主要電気工作物の自動停止機能により運転が自動停止したとき、又は操作員により緊急に手動停止した場合をいう。</u></p> <p><u>「その使用が不可能となり、若しくはその使用を中止すること」とは、例えば発電所の燃料貯蔵タンクにおいて、その貯蔵するという機能に支障が生じ、その使用が不可能となり、又はその使用を中止することをいう。</u></p> <p><u>したがって、停止を伴う点検中に不具合が発見された場合や、運転中又は使用中の電気工作物に機能低下が認められても、上記以外の場合であって補修（当該機器の補修のための計画的な停止を含む。）により機能を回復出来るときは、事故対象とならない。</u></p> <p>② 「誤操作若しくは操作しないこと」：電気工作物の操作員のヒューマンエラーによる事故の発生を想定し、「誤操作」とは、機器の操作手順書等に記載されている本来の当該機器の操作手順と異なる操作を行うことをいう。「操作しないこと」とは、例えば機器の誤動作阻止のための操作をしないことや点検後の復旧作業において規定の手順どおりなされていない状態のままにしておく<u>というように</u>、本来機器があるべき状態に操作しないことをいう。</p>

改正案	現 行
<p><u>組織的な判断・対応等の場合（例えば、マニュアルの不整備による事故等。）も対象になり得る。</u></p> <p>③ <u>「入院した場合に限る。」：電気による感電負傷の場合は、一般的な熱傷等による火傷等と異なり、電気工作物の接地状況や使用場所の環境、充電部に接触した人の着衣の状況等によって、体内を通過する電流の大きさや通過経路等が異なり、それらに応じて人体への影響が異なるという特徴を有する。また、感電による人体への影響は、体表面の損傷の程度では重症度が判断できないこと、時間の経過とともに局所の損傷が拡大するという特徴も有することなどから、加療期間ではなく、入院という行為を事故報告の対象としたものである。</u></p> <p>(3) 運用上の留意点</p> <p>① <u>電気工作物の事故を原因とする死亡や、傷害の治療等を目的とした入院であることが明らかでない場合は、原則、医師の診断結果により判断することとする。また、医師の診断結果が得られない場合は、当該事故の状況を客観的に調査の上、判断することとする。なお、医師の診断書等により、経過観察、検査等を目的とした入院であることが明らかな場合は、報告を要しない。</u></p> <p>② <u>詳報の提出に際しては、医師の診断書に傷害の治療に要する期間が記載されている場合には、当該期間を記載することが好ましい。</u></p>	<p>(新設)</p> <p>(3) 運用上の留意点</p> <p>電気工作物の事故を原因とする傷害の治療を目的とした入院であることが明らかでない場合は、医師の診断結果により判断することとする。</p>

改正案	現 行
<p data-bbox="91 209 477 240">【第1項第2号】<u>電気火災事故</u></p> <div data-bbox="91 248 1099 304" style="border: 1px solid black; padding: 2px;"> <p data-bbox="98 264 965 296">二 電気火災事故（工作物にあつては、その半焼以上の場合に限る。）</p> </div> <p data-bbox="125 435 253 467">(1) 目的</p> <p data-bbox="163 491 1122 635">電気工作物が原因で火災が発生し、電気工作物以外の物件や他人の財産に損害を与えた場合に、これを調査し、その防止対策を講ずる必要がある<u>ことから</u>、報告を求めるものである。</p> <p data-bbox="125 718 418 750">(2) 語句・文章の解釈</p> <p data-bbox="152 774 1122 917">① 「<u>電気火災事故</u>」：発電機、電線路、変圧器、配線等に漏電、短絡、閃絡等の電氣的異常状態が発生し、それによる発熱、発火が原因で、<u>建造物、車両、その他の工作物、山林等に火災を起こしたものをいう。</u></p> <p data-bbox="152 941 981 973">② 「<u>工作物</u>」：<u>人工的に製作し、地上又は地中に設置したもの。</u></p> <p data-bbox="152 997 1122 1204">③ 「<u>半焼</u>」：火災による損壊の程度が工作物（建物については延床面積）の20%以上70%程度であること（内閣府の「災害に係る住宅等の被害認定基準検討委員会」で検討された「<u>災害の被害認定基準について（平成13年6月28日府政防第518号）</u>」に準ずる。）。</p> <p data-bbox="125 1281 392 1313">(3) 運用上の留意点</p> <p data-bbox="125 1337 179 1369">(略)</p>	<p data-bbox="1144 209 1346 240">【第1項第2号】</p> <div data-bbox="1144 248 2130 368" style="border: 1px solid black; padding: 2px;"> <p data-bbox="1151 264 2130 352">二 電気火災事故（工作物にあつては、その半焼以上の場合に限る。<u>ただし、前号及び次号から第5号までに掲げるものを除く。</u>）</p> </div> <p data-bbox="1178 435 1305 467">(1) 目的</p> <p data-bbox="1216 491 2163 635">電気工作物が原因で火災が発生し、電気工作物以外の物件や他人の財産に損害を与えた場合に、これを調査し、その防止対策を講ずる必要がある<u>ため</u>、報告を求めるものである。</p> <p data-bbox="1178 718 1471 750">(2) 語句・文章の解釈</p> <p data-bbox="1178 774 1261 805">(新設)</p> <p data-bbox="1189 941 1989 973">① 「<u>工作物</u>」：地上又は地中に、<u>人工を加えて製作したもの。</u></p> <p data-bbox="1189 997 2163 1141">② 「<u>半焼</u>」：火災による損壊の程度が工作物（建物については延床面積）の20%以上70%程度であること（内閣府の「災害に係る住宅等の被害認定基準検討委員会」で検討された<u>災害の被害認定基準</u>に準ずる。）。</p> <p data-bbox="1178 1281 1444 1313">(3) 運用上の留意点</p> <p data-bbox="1178 1337 1232 1369">(略)</p>

改正案	現 行
<p data-bbox="91 209 672 240">【第1項第3号】<u>電気工作物に係る物損等事故</u></p> <div data-bbox="91 256 1113 424" style="border: 1px solid black; padding: 5px;"> <p data-bbox="114 268 1099 413">三 <u>電気工作物の破損又は電気工作物の誤操作若しくは電気工作物を操作しないことにより、他の物件に損傷を与え、又はその機能の全部又は一部を損なわせた事故</u></p> </div> <p data-bbox="120 549 253 580">(1) 目的</p> <p data-bbox="147 604 1126 805">電気工作物の破損や電気工作物の操作員のヒューマンエラーにより、<u>第三者の物件に損傷や機能の喪失を与えた事故は、法目的である「公共の安全の確保」の観点から重要なものであり、電気工作物の保守管理運営の面で十分検討し対策を立てる必要があるため、報告を求めるものである。</u></p> <p data-bbox="120 885 418 917">(2) 語句・文章の解釈</p> <p data-bbox="147 941 1126 1031">① <u>「他の物件」：事故を発生させた電気工作物設置者及び関係事業者でない第三者の物件のことをいう。</u></p> <p data-bbox="147 1054 1126 1256">② <u>「他の物件に損傷を与え、又はその機能の全部又は一部を損なわせた事故」：電気工作物の破損又は電気工作物の操作員のヒューマンエラーにより、第三者の物件に対して本来の機能を損なわせるなどの被害を与えた事故のことをいい、例えば、以下の事故が挙げられる。</u></p> <p data-bbox="188 1279 1126 1369">イ <u>電気工作物の事故に伴う異常電圧によって、広範囲にわたる供給先の電化製品等の損壊</u></p> <p data-bbox="188 1393 784 1425">ロ <u>支持物の傾斜、折損等による家屋等の損壊</u></p>	<p data-bbox="1144 209 1346 240">【第1項第3号】</p> <div data-bbox="1144 256 2166 474" style="border: 1px solid black; padding: 5px;"> <p data-bbox="1167 268 2145 469">三 <u>破損事故又は電気工作物の誤操作若しくは電気工作物を操作しないことにより、公共の財産に被害を与え、道路、公園、学校その他の公共の用に供する施設若しくは工作物の使用を不可能にさせた事故又は社会的に影響を及ぼした事故（前二号に掲げるものを除く。）</u></p> </div> <p data-bbox="1173 549 1305 580">(1) 目的</p> <p data-bbox="1187 604 2166 805">電気工作物の破損事故や電気工作物の操作員のヒューマンエラーにより、<u>公共の財産に被害を与えて使用不可能とし、又は、社会的に影響を及ぼした事故は、電気工作物の保守管理運営の面で十分検討し対策を立てる必要があるため、報告を求めるものである。</u></p> <p data-bbox="1173 885 1471 917">(2) 語句・文章の解釈</p> <p data-bbox="1173 941 2166 1031">① <u>「公共の財産」：道路、公園、学校等その便益を不特定多数の者が享受するものをいう。</u></p> <p data-bbox="1173 1054 2166 1313">② <u>「公共の財産に被害を与え、道路、公園、学校その他の公共の用に供する施設若しくは工作物の使用を不可能にさせた事故」：公共の施設又は公共の工作物を使用することが不可能になる規模の被害を与えた事故のことをいい、例えば電気工作物の破損事故に伴う土砂崩れにより道路を塞ぎ、人の通行を阻害した場合などをいう。</u></p> <p data-bbox="1173 1337 2166 1425">③ <u>「社会的に影響を及ぼした事故」：電気工作物の落下や倒壊の他、台風、雪、豪雨、地震等を起因とした電気工作物の破損事故に伴い、社会的</u></p>

改正案	現 行
<p>ハ <u>太陽電池モジュール又は架台、風車のブレード等の構外への飛散等</u></p> <p>ニ <u>電気工作物の破損等に伴う土砂崩れ等による道路等の閉塞、交通の著しい阻害等</u></p> <p>③ <u>②の場合、自然現象（台風、大雪、豪雨、地震等）を起因とした電気工作物の破損等に伴う他物損事故も対象となるが、電気工作物設置者が事故の発生を防止するための対策を講じることが合理的に達成不可能な事故については対象から除くことができ、例えば、以下の事故が挙げられる。</u></p> <p>イ <u>落雷が電路を通過し、直接、工場や家庭内での製品、機器等の異常や不良に至ったもの</u></p> <p>ロ <u>停電に伴う製品、機器等の異常や不良等に至ったもの</u></p> <p>ハ <u>飛来物、浮遊物、倒木、土砂崩れ等による電気工作物の破損に伴う2次被害</u></p> <p>ニ <u>車の衝突事故による電柱倒壊等に伴う2次被害</u></p> <p>ホ <u>電氣的若しくは磁氣的な影響による異常電圧等（開閉過電圧や誘電電圧等）により、他の電気工作物の異常や不良に至ったもの</u></p>	<p><u>に影響を及ぼした事故（例えば、変電所の1フィーダーで配電される範囲の一般需要家の電気機器（家庭電気製品を含む。）に同一の原因による被害（異常電圧（電気工作物の破損事故を伴わない落雷のみによるものを除く。）による故障など）を与えた事故や施設又は工作物（電気事業の用に供する電気工作物や自家用受電設備等の電気工作物は除く。）に著しい被害（家屋の著しい破壊など）を与えた事故）のことをいう。</u></p> <p><u>なお、停電に伴う製品の不良や車の衝突事故による電柱倒壊等の2次被害に伴う破損事故は報告対象には含まれない。</u></p>
<p>(3) 運用上の留意点 (削る)</p>	<p>(3) 運用上の留意点</p> <p><u>電気工作物の破損事故又は電気工作物の操作員のヒューマンエラーが起因となって公共の財産に被害を与えて使用不能とし、又は、社会的に影響を及ぼした事故（一個人の責めによらない行政側が対応すべき規模の事故）が発生したかどうかについては、立証が困難な場合が多い。また、その被害も相当の時間を経過した後に判明する場合も多い。このため、何らかの被害に関</u></p>

改正案	現 行
<p>本号では、電気工作物の破損又は電気工作物の操作員のヒューマンエラーにより被害を与えたことが明らかになった時を「事故の発生を知った時」と解する。</p> <p>なお、当該電気工作物の設置者が被害に対する適切な措置や対策を早期に<u>講ずべき責務があることに留意すること。</u></p> <p>【第1項第4号、第5号】 <u>主要電気工作物の破損事故</u></p>	<p><u>する情報が得られた場合には、積極的にその被害の状況や原因を調査し、これらの関係を明確にしておくことが必要である。</u></p> <p>本号では、電気工作物の破損<u>事故</u>又は電気工作物の操作員のヒューマンエラーにより当該被害を与えたことが明らかになった時を「事故の発生を知った時」と解する<u>こととする。</u></p> <p>なお、当該電気工作物の設置者が被害に対する適切な措置や対策を早期に<u>講ずることは言うまでもない。</u></p> <p>【第1項第4号、第5号】</p>
<p>四 次に掲げるものに属する主要電気工作物の破損事故</p> <p>イ <u>出力九十万キロワット未満の水力発電所</u></p> <p>ロ <u>火力発電所（汽力、ガスタービン（出力千キロワット以上のものに限る。）、内燃力（出力一万キロワット以上のものに限る。）、これら以外を原動力とするもの又は二以上の原動力を組み合わせたものを原動力とするものをいう。以下同じ。）における発電設備（発電機及びその発電機と一体となつて発電の用に供される原動力設備並びに電気設備の総合体をいう。以下同じ。ただし、ハに掲げるものを除く。）</u></p> <p>ハ <u>火力発電所における汽力又は汽力を含む二以上の原動力を組み合わせたものを原動力とする発電設備であつて、出力千キロワット未満のもの（ボイラーに係るものを除く。）</u></p> <p>ニ <u>出力五百キロワット以上の燃料電池発電所</u></p> <p>ホ <u>出力五百キロワット以上の太陽電池発電所</u></p>	<p>四 次に掲げるものに属する主要電気工作物の破損事故（<u>第一号、前号、第八号から第十号に掲げるものを除く。</u>）</p> <p>五 <u>（略）</u></p>

改正案	現 行
<p>へ <u>出力五百キロワット以上の風力発電所</u></p> <p>ト <u>電圧十七万ボルト以上（構内以外の場所から伝送される電気を変成するために設置する変圧器その他の電気工作物の総合体であつて、構内以外の場所に伝送するためのもの以外のものにあつては十万ボルト以上）三十万ボルト未満の変電所（容量三十万キロボルトアンペア以上若しくは出力三十万キロワット以上の周波数変換機器又は出力十万キロワット以上の整流機器を設置するものを除く。）</u></p> <p>チ <u>電圧十七万ボルト以上三十万ボルト未満の送電線路（直流のものを除く。）</u></p> <p>リ <u>電圧一万ボルト以上の需要設備（自家用電気工作物を設置する者に限る。）</u></p> <p>五 <u>次に掲げるものに属する主要電気工作物の破損事故（第一号、第三号及び第八号から第十号までに掲げるものを除く。）</u></p> <p>イ <u>出力九十万キロワット以上の水力発電所</u></p> <p>ロ <u>電圧三十万ボルト以上の変電所又は容量三十万キロボルトアンペア以上若しくは出力三十万キロワット以上の周波数変換機器若しくは出力十万キロワット以上の整流機器を設置する変電所</u></p> <p>ハ <u>電圧三十万ボルト（直流にあつては電圧十七万ボルト）以上の送電線路</u></p>	
<p>(1) 目的</p> <p>主要電気工作物の破損事故が発生すれば、当該施設の機能に重大な影響を及ぼすばかりでなく、関連施設への重大な影響、<u>復旧の遅れ</u>、<u>供給支障事故を誘</u></p>	<p>(1) 目的</p> <p>主要電気工作物の破損事故が発生すれば、当該施設の機能に重大な影響を及ぼすばかりでなく、関連施設への重大な影響、供給支障事故を誘発するおそれ</p>

改正案	現 行
<p>発するおそれがあるため、当該事故の原因を究明し、<u>再発防止策</u>を図るために報告を求めるものである。</p> <p>(2) 語句・文章の解釈</p> <p>① 「主要電気工作物」：規則第1条第2項第1号に掲げているものをいう。主要電気工作物は、発電所等の運転、維持又は保安対策上必要不可欠な電気工作物として定めているものであり、工事計画認可又は届出が必要な電気工作物を<u>基本</u>としている。同項第4号に規定しているとおおり、主要電気工作物は、別に告示する（平成16年経済産業省告示第66号）「主設備」から構成されている。</p> <p>② 「<u>破損事故</u>」：規則第1条第2項第3号に掲げるものをいい、<u>電気工作物の変形、損傷若しくは破壊、火災又は絶縁劣化若しくは絶縁破壊が原因で、当該電気工作物の機能が低下又は喪失したことにより、「直ちに、その運転が停止し、若しくはその運転を停止しなければならなくなること」又は「その使用が不可能となり、若しくはその使用を中止すること」をいう。</u></p> <p>③ 「<u>直ちに、その運転が停止し、若しくはその運転を停止しなければならなくなること</u>」：例えば、<u>電気工作物の機能低下が、運転中において想定されている機能低下の範囲を超えて急激に起きた場合であって、当該電気工作物の自動停止機能により運転が自動停止した場合、又は、操作員が緊急に手動停止した場合をいう。</u></p> <p>④ 「<u>その使用が不可能となり、若しくはその使用を中止すること</u>」：例え</p>	<p>があるため、当該事故の原因を究明し、<u>再発防止対策</u>を図るために報告を求めるものである。</p> <p>(2) 語句・文章の解釈</p> <p>「主要電気工作物」：規則第1条第2項第1号に掲げ<u>ら</u>れているものをいう。主要電気工作物は、発電所等の運転、維持又は保安対策上必要不可欠な電気工作物として定め<u>ら</u>れているものであり、工事計画認可又は届出が必要な電気工作物としている。同項第4号に規定しているとおおり、主要電気工作物は、別に告示する（平成16年経済産業省告示第66号）「主設備」から構成されている。</p>

改正案	現 行
<p><u>ば、発電所の燃料貯蔵タンクにおいて、その貯蔵機能に支障が生じた結果、その使用が不可能となったこと、又は、その使用を中止することをいう。</u></p> <p>⑤ <u>主要電気工作物の破損事故の対象とならない例として以下の場合が挙げられる。</u></p> <p>イ <u>停止を伴う点検中に不具合が発生した場合</u></p> <p>ロ <u>運転中又は使用中の電気工作物に機能低下が認められた場合であつて、補修（当該設備、機器の補修のための計画的な運転停止を含む。）により機能を回復可能な場合</u></p> <p>(3) 運用上の留意点</p> <p>① <u>主要電気工作物の破損事故は、当該主要電気工作物の使用を開始して以降の事故を対象とする。したがって、当該電気工作物の工事中、試充電中又は試運転中に発生した破損については、破損事故とは解さない。また、設備、機器の停止を伴う点検中に発見した当該設備、機器の不具合は、主要電気工作物の破損事故の報告対象とはしない。</u></p> <p>② <u>自然現象に起因する事故であつて、十分な保安実績が有り、事故発生後の対処方法として、早期に部品交換、原型復旧、機能回復を行う等の方法が十分に確立している場合、詳報は、再発防止策の欄を除いたものを提出することで足りることとする。なお、当該事故の例としては、以下の場合が挙げられる。</u></p> <p>イ <u>台風等の際に飛来物により送電線が断線した場合</u></p>	<p>現 行</p> <p>(3) 運用上の留意点</p> <p>主要電気工作物の破損事故は、当該主要電気工作物の使用を開始して以降の事故を対象とする。したがって、当該電気工作物の工事中、試充電中又は試運転中に発生した破損については、破損事故とはみなさない。また、機器の停止を伴う点検中に発見した当該機器の不具合は、<u>規則第3条第1項に掲げる事故報告の対象とはしない。</u></p> <p>(新設)</p>

改正案	現 行
<p data-bbox="190 210 667 242">ロ <u>洪水により発電所が流出した場合</u></p> <p data-bbox="91 322 474 354">【第1項第6号】<u>発電支障事故</u></p> <div data-bbox="91 367 1111 539" style="border: 1px solid black; padding: 5px;"> <p data-bbox="91 379 1099 523">六 <u>水力発電所、火力発電所、燃料電池発電所、太陽電池発電所又は風力発電所に属する出力十キロワット以上の発電設備に係る七日間以上の発電支障事故</u></p> </div> <p data-bbox="120 606 250 638">(1) <u>目的</u></p> <p data-bbox="120 662 1122 750"><u>電気の安定供給確保等の観点から、発電設備の保安状況の把握が重要であることから、報告を求めるものである。</u></p> <p data-bbox="120 829 418 861">(2) <u>語句・文章の解釈</u></p> <p data-bbox="152 885 1126 1145">① <u>「発電支障事故」：規則第1条第2項第8号に掲げる「発電所の電気工作物の故障、損傷、破損、欠陥又は電気工作物の誤操作若しくは電気工作物を操作しないことにより当該発電所の発電設備が直ちに運転が停止し、又はその運転を停止しなければならなくなることをいい、例えば、以下の事故が挙げられる。</u></p> <p data-bbox="190 1169 1122 1257">イ <u>石炭のサイロ、ベルトコンベア若しくはミル又は動力用・制御用ケーブル等の電気系統の破損や火災</u></p> <p data-bbox="190 1281 557 1313">ロ <u>保護装置の誤動作や故障</u></p> <p data-bbox="190 1337 613 1369">ハ <u>発電機やタービンの異常振動</u></p> <p data-bbox="190 1393 418 1425">ニ <u>燃焼器の異常</u></p>	<p data-bbox="1182 322 1261 354">(新設)</p>

改正案	現 行
<p>ホ <u>蒸気系統、油循環系統、冷却水系統、水素・炭酸ガス系統等のバルブ・ストレーナー等の閉塞や漏洩</u></p> <p>へ <u>取水口や復水器の異常</u></p> <p>ト <u>運転員の操作ミス</u></p> <p>② <u>「発電設備が直ちに運転が停止し、又はその運転を停止しなければならなくなること」：【第1項第4号、第5号】主要電気工作物の破損事故(2)③と同じ。</u></p> <p>③ <u>「七日間以上」：発電支障期間は、発電停止日から運転可能になった日までをいい、運転可能となった後に、電気工作物設置者の判断で運転を行わなかった期間は含まない。</u></p> <p>④ <u>発電支障事故の対象とする電気工作物は、一般送配電事業者が維持し、及び運用する電線路その他の電気工作物に電線路に接続し、かつ、専ら発電事業の用に供するための発電設備（単一の発電設備の出力が10万キロワット以上であるものに限る。）を対象とする。</u></p> <p><u>(3) 運用上の留意点</u></p> <p>① <u>発電支障事故は、発電設備の営業運転を開始して以降の事故を対象とする。したがって、電気工作物の工事中、試充電中又は試運転中に発生した事故は、発電支障事故とは解さない。また、発電設備の停止を伴う点検中に発見した設備、機器の不具合については発電支障事故の対象としない。その他、保安停止や、流木、土砂、くらげ等の流入及び除去作業に伴う発電停止も対象外とする。</u></p>	

改正案	現 行
<p>② <u>詳報の提出に際し、他施設での同種の事故の発生防止策の検討に資すると思われる場合のみ、再発防止策の欄の記載を要することとし、例えば、以下の場合が挙げられる。</u></p> <p>イ <u>誤操作により単一の事故が起因であったものの、その拡大を防止せずに複数の系に影響を及ぼしたもの</u></p> <p>ロ <u>最新の技術を用いた設備で発生した事故であって、過去に同様の事故が発生していない又は少ないもの</u></p> <p>ハ <u>同一の箇所に同一の条件で過去に複数回事故が発生したものの、十分な対策が取られていないもの（設備の運用方針として事故後早期に部品交換をする前提であるもの、又は、これまでの知見に基づき対処方法が確立しているものを除く。）</u></p>	
<p>【第1項第7号、第8号】供給支障事故</p>	<p>【第1項第6号、第7号】</p>
<p>七 <u>供給支障電力が七千キロワット以上七万キロワット未満の供給支障事故であつて、その供給支障時間が一時間以上のもの、又は供給支障電力が七万キロワット以上十万キロワット未満の供給支障事故であつて、その供給支障時間が十分以上のもの（第九号及び第十一号に掲げるものを除く。）</u></p> <p>八 <u>供給支障電力が十万キロワット以上の供給支障事故であつて、その供給支障時間が十分以上のもの（第十号及び第十一号に掲げるものを除く。）</u></p>	<p>六 <u>供給支障電力が七千キロワット以上七万キロワット未満の供給支障事故であつて、その供給支障時間が一時間以上のもの、又は供給支障電力が七万キロワット以上十万キロワット未満の供給支障事故であつて、その供給支障時間が十分以上のもの（第三号及び第八号に掲げるものを除く。）</u></p> <p>七 <u>供給支障電力が十万キロワット以上の供給支障事故であつて、その供給支障時間が十分以上のもの（第三号及び第九号に掲げるものを除く。）</u></p>
<p>(1) 目的</p> <p>供給支障事故は、人身や物件に対して被害を及ぼさない場合であっても、<u>我</u></p>	<p>(1) 目的</p> <p>供給支障事故は、人身や物件に対して被害を及ぼさない場合であっても、<u>そ</u></p>

改正案	現 行
<p><u>が国が電力に大きく依存していることに鑑み、広範な停電の発生等が発生した場合には、社会的に重大な影響を及ぼすおそれ大きいことから、報告を求めるものである。</u></p> <p>(2) 語句・文章の解釈</p> <p>① 「供給支障事故」：<u>規則第1条第2項第5号に掲げる「破損事故又は電気工作物の誤操作若しくは電気工作物を操作しないことにより電気の利用者(当該電気工作物を管理する者を除く。)に対し、電気の供給が停止し、又は電気の使用を緊急に制限することをいう。ただし、電路が自動的に再開路されることにより電気の供給の停止が終了した場合を除く。」ことをいう。</u></p> <p>イ (略)</p> <p>ロ (略)</p> <p>ハ (略)</p> <p>ニ 規則第1条第2項第5号中「当該電気工作物を管理する者を除く。」とあるのは、自家用電気工作物に事故があつて、その事故による支障が電気事業者に波及したことにより、当該自家用電気工作物設置者への電気の供給が停止又は使用が制限された場合には、それは供給支障とはみなさないという意味である。すなわち、専用線で受電している自家用電気工作物設置者の場合、<u>自家用構内の事故のため、一般送配電事業者の変電所の引出口遮断器がトリップして停電しても、これは供給支障事故とはみなさない。</u></p>	<p><u>の社会的影響は大きいことから、報告を求めるものである。</u></p> <p>(2) 語句・文章の解釈</p> <p>① 「供給支障事故」：<u>電気工作物の破損事故又は電気工作物の誤操作若しくは電気工作物を操作しないことにより電気の利用者(当該電気工作物を管理する者を除く。)に対し、電気の供給が停止し、又は電気の使用を緊急に制限することをいう。ただし、電路が自動的に再開路されることにより電気の供給の停止が終了した場合を除く。(規則第1条第2項第5号)。</u></p> <p>(a) (略)</p> <p>(b) (略)</p> <p>(c) (略)</p> <p>(d) 規則第1条第2項第5号中「当該電気工作物を管理する者を除く。」とあるのは、自家用電気工作物に事故があつて、その事故による支障が電気事業者に波及したことにより、当該自家用電気工作物設置者への電気の供給が停止又は使用が制限された場合には、それは供給支障とはみなさないという意味である。すなわち、専用線で受電している自家用電気工作物設置者の場合、<u>自家用構内の事故のため、電気事業者の変電所の引出口遮断器がトリップして停電しても、これは供給支障事故とはみなさない。</u></p>

改正案	現 行
<p>(削る)</p> <p>② 「供給支障電力」：規則第1条第2項第6号に掲げている「供給支障事故が発生した場合において、電気の利用者に対し、電気の供給が停止し、又は電気の使用を制限する直前と直後との供給電力の差」をいう。</p> <p>イ 供給支障電力の算定は、事故の直前と直後の供給電力の差を取ること を定めており、事故により停電した場合には、事故直前の供給電力が 供給支障電力となる。個々の供給支障電力を算定するのは、発電所 にある需要電力の計量地点ごとに、停電又は制限した電力を測定する が、計量の困難な場合は事故前後の潮流の変化や総需要計から総合的 に推定する。事故によっては、供給支障の及ぶ範囲が2以上のフィー ダー又は2以上の変電所にわたる場合があるが、この場合の供給支障 電力は、それぞれの停電又は制限した電力の合計で表す。ただし、自 家用電気工作物からの波及事故の場合には、事故の原因になった自家 用電気工作物の受電電力はこの停電又は制限した電力の合計には含ま ない。</p> <p>ロ (略)</p> <p>ハ (略)</p> <p>③ 「供給支障時間」：規則第1条第2項第7号に掲げる「供給支障事故が 発生した時から、電気の供給の停止又は使用の制限が終了した時まで の時間」をいう。なお、規則第3条第1項第7号又は第8号に掲げる供給支障</p>	<p><u>(e) 低圧配電線路のみに係る停電は供給支障事故には含まない。</u></p> <p>② 「供給支障電力」：供給支障事故が発生した場合において、電気の利用者 に対し、電気の供給が停止し、又は電気の使用を制限する直前と直後との供 給電力の差をいう（規則第1条第2項第6号）。</p> <p>(a) 供給支障電力の算定は、事故の直前と直後の供給電力の差を取ること を定めており、事故により停電した場合には、事故直前の供給電力が供給 支障電力となる。個々の供給支障電力を算定するのは、発電所にある需 要電力の計量地点ごとに、停電又は制限した電力を測定するが、計量の困 難な場合は事故前後の潮流の変化や総需要計から総合的に推定する。事故 によっては、供給支障の及ぶ範囲が2以上のフィーダー又は2以上の変電 所にわたる場合があるが、この場合の供給支障電力は、それぞれの停電又 は制限した電力の合計で表わす。ただし、自家用からの波及事故の場合に は、事故の原因になった自家用の受電電力はこの停電又は制限した電力の 合計には含まない。</p> <p>(b) (略)</p> <p>(c) (略)</p> <p>③ 「供給支障時間」：供給支障事故が発生した時から、電気の供給の停止又 は使用の制限が終了した時までの時間をいう。<u>この場合において、配電線路</u> に係る供給支障事故については、当該配電線路の発電所又は変電所の引出口</p>

改正案	現 行
<p><u>電力を一旦超過した供給支障事故は、当該供給支障電力を超過した時間から、当該供給支障が解消されたときまでの時間を、供給支障時間という。</u></p> <p><u>ただし、配電線路に係る供給支障事故については、当該配電線路の発電所又は変電所の引出口遮断器が投入されたときに、当該配電線路に係る供給支障が終了したものとみなす。</u></p> <p>イ 供給支障時間は、供給支障が発生してから供給能力が回復し、必要な電気の送配電が可能になって、電気の利用者に対する電気の供給が通常どおり行われるまでの時間をいう。</p> <p>ここで、電気の利用者に対して電気の供給を開始する又は電気の使用の制限を解除する場合、電気の利用者の都合で受電しないときは、当該利用者の受電用遮断器まで電気を供給した時又は当該利用者に対し供給能力が回復していつでも供給できることを通知した時をもって、供給の停止又は使用の制限が終了した時とみなす<u>ことができる。</u></p> <p>(削る)</p>	<p><u>遮断器が投入されたとき、当該配電線路に係る電気の供給の停止が終了したものとみなす（規則第1条第2項第7号）。</u></p> <p>(a) <u>すなわち、供給支障時間は、供給支障が発生してから供給能力が回復し、必要な電気の送配電が可能になって、電気の利用者に対する電気の供給が通常どおり行われるまでの時間をいう。</u></p> <p>ここで、電気の利用者に対して電気の供給を開始する又は電気の使用の制限を解除する場合、電気の利用者の都合で受電しないときは、当該利用者の受電用遮断器まで電気を供給した時又は当該利用者に対し供給能力が回復していつでも供給できることを通知した時をもって、供給の停止又は使用の制限が終了した時とみなす。</p> <p>(b) <u>一方、高圧配電線路は供給区域も広く、かつ、複雑な場合が多いので、電線路の途中に開閉器を設置して、適当なブロックに切り分けられるようになっている。そして事故復旧操作も、まず、事故の原因となった箇所を開閉器によって切り離して健全な地区に速やかに配電し、追って事故発生区域の復旧が完了次第、その区域に対する開閉器を投入する場合が普通である。このような場合には、供給支障事故を一定範囲に絞ることが可能であり、一方、供給支障電力の測定もフィーダー出口の計器に頼る以外に適当な方法がない。そこで高圧配電線路では、その発電所の引出口遮断器を投入したときは、電気の供給の停止が終了したも</u></p>

改正案	現 行
<p data-bbox="174 268 1120 357">ロ <u>変電所や送電線路の電源側の事故時に隣接バンクなど他系統へ系統切替をしたときもイと同様の扱いとすることができる。</u></p> <p data-bbox="125 437 389 469">(3) 運用上の留意点</p> <p data-bbox="116 494 1120 584">台風、高潮、豪雨、津波、地震、落雷、雪等の自然災害に起因する供給支障事故は、<u>規則第3条第2項ただし書の規定のとおり、詳報の対象とはしない。</u></p>	<p data-bbox="1236 213 1406 245"><u>のとみなす。</u></p> <p data-bbox="1182 268 1263 300">(新設)</p> <p data-bbox="1182 437 1447 469">(3) 運用上の留意点</p> <p data-bbox="1164 494 2163 638">台風、高潮、豪雨、津波、地震、落雷、雪等の自然災害に起因する<u>広範囲地域にわたる供給支障は、本規則の事故報告の対象ではない。ただし、必要に応じて法第106条に基づき報告を求めることとする。</u></p>

改正案

【第1項第9号、第10号、第11号】他社への波及事故

九 電気工作物の破損又は電気工作物の誤操作若しくは電気工作物を操作しないことにより他の電気事業者に供給支障電力が七千キロワット以上七万キロワット未満の供給支障を発生させた事故であつて、その支障時間が一時間以上のもの、又は供給支障電力が七万キロワット以上十万キロワット未満の供給支障を発生させた事故であつて、その支障時間が十分以上のもの

十 電気工作物の破損又は電気工作物の誤操作若しくは電気工作物を操作しないことにより他の電気事業者に供給支障電力が十万キロワット以上の供給支障を発生させた事故であつて、その支障時間が十分以上のもの

十一 一般送配電事業者の一般送配電事業の用に供する電気工作物又は特定送配電事業者の特定送配電事業の用に供する電気工作物と電氣的に接続されている電圧三千ボルト以上の自家用電気工作物の破損事故又は自家用電気工作物の誤操作若しくは自家用電気工作物を操作しないことにより一般送配電事業者又は特定送配電事業者に供給支障を発生させた事故

(1) 目的

一般送配電事業者間又は発電事業者から他の電気事業者への波及事故を規定したものであり、例えば、大規模発電所が脱落したり、基幹系送電系統を通じた電気事故の波及により大規模な供給支障を誘発したりするおそれがある。このため、電気事業者相互の協調のあり方等を検討する必要から、電気

現行

【第1項第8号、第9号、第10号】

八 破損事故又は電気工作物の誤操作若しくは電気工作物を操作しないことにより他の電気事業者に供給支障電力が七千キロワット以上七万キロワット未満の供給支障を発生させた事故であつて、その支障時間が一時間以上のもの、又は供給支障電力が七万キロワット以上十万キロワット未満の供給支障を発生させた事故であつて、その支障時間が十分以上のもの (第三号に掲げるものを除く。)

九 破損事故又は電気工作物の誤操作若しくは電気工作物を操作しないことにより他の電気事業者に供給支障電力が十万キロワット以上の供給支障を発生させた事故であつて、その支障時間が十分以上のもの (第三号に掲げるものを除く。)

十 一般電気事業者の一般電気事業の用に供する電気工作物又は特定電気事業者の特定電気事業の用に供する電気工作物と電氣的に接続されている電圧三千ボルト以上の自家用電気工作物の破損事故又は自家用電気工作物の誤操作若しくは自家用電気工作物を操作しないことにより一般電気事業者又は特定電気事業者に供給支障を発生させた事故 (第三号に掲げるものを除く。)

(1) 目的

改正前の電気関係報告規則におけるいわゆる他社への波及事故を規定したものである。一般電気事業者間又は卸電気事業者から他の電気事業者への波及事故の場合、例えば、大容量発電所が脱落したり、基幹系送電系統を通じた電気事故の波及により大規模な供給支障を誘発するおそれがある。このた

改正案	現 行
<p>事業者から報告を求めるものである（規則第3条第1項第<u>9号</u>及び第<u>10号</u>）。</p> <p>一方、自家用電気工作物設置者については、その数も多く、自社の電気事故が他の電気事業者に波及しないよう、受電設備の保守、管理及び電気事業者と自家用電気工作物設置者との相互の協調のあり方等を検討する必要があるため、電圧<u>3,000</u>ボルト以上の電圧で受電する自家用電気工作物の設置者から報告を求めるものである（規則第3条第1項第<u>11号</u>）。</p> <p>(2) 運用上の留意点</p> <p>① <u>電気事故は、本来、事故を発生させた側に責任があることが原則であり、発生した事故は設置者自身の施設内に留めるのが原則であることから、各種保護装置や遮断器を設置して波及事故防止対策を講じている。しかしながら、当該装置等が有効に機能しなかった場合など波及事故が発生した場合は、発端となった事故を発生させた電気事業者又は自家用電気工作物設置者から報告を求める。ただし、一般送配電事業の用に供する配電線路等が自動的に再開路に成功した場合を除く。</u></p> <p>② 規則第3条第1項の表第<u>9号</u>又は同表第<u>10号</u>に規定する他社へ供給支障を発生させた事故の供給支障電力の大きさ及び供給支障時間の長さについては、第<u>7号</u>、第<u>8号</u>に規定する供給支障事故に準ずる。</p>	<p>め、電気事業者相互の協調のあり方等を検討する必要から、電気事業者から報告を求めるものである（規則第3条第1項の表第<u>8号</u>、第<u>9号</u>）。</p> <p>一方、自家用電気工作物設置者については、その数も多く、自社の電気事故が他の電気事業者に波及しないよう、受電設備の保守、管理及び電気事業者と自家用電気工作物設置者との相互の協調のあり方等を検討する必要があるため、電圧<u>3,000</u>ボルト以上の電圧で受電する自家用電気工作物の設置者から報告を求めるものである（規則第3条第1項の表第<u>10号</u>）。</p> <p>(2) 運用上の留意点 (新設)</p> <p>規則第3条第1項の表第<u>8号</u>又は同表第<u>9号</u>に規定する他社へ供給支障を発生させた事故の供給支障電力の大きさ及び供給支障時間の長さについては、第<u>6号</u>、第<u>7号</u>に規定する供給支障事故に準ずる。</p>

改正案

【第1項第12号】ダムからの異常放流事故

十二 ダムによつて貯留された流水が当該ダムの洪水吐きから異常に放流された事故

(1) 目的

ダムについては、その異常放流が社会的に大きな影響をもたらす事故に拡大するおそれがあることに鑑み、ダムに限って、本号において報告を求めるものである。なお、本報告は、平成14年に発電用ダムにおいて洪水吐きゲート誤作動（制御システムのソフトウェア不具合）による異常放流を契機として追加されたものである。

(2) 語句・文章の解釈

「異常に放流された事故」：操作員の誤操作又は制御システムの不具合によるダムの洪水吐きゲートの誤作動を停止する操作がなされなかったことにより、例えばダムの操作に関する規程（河川法（昭和39年法律第167号）第47条）に反して、ダムによつて貯留された流水が放流された場合のことをいう。

【第1項第13号】電気工作物に係る社会的影響を及ぼした事故

十三 第1号から前号までの事故以外の事故であつて、電気工作物に係る社会的に影響を及ぼした事故

現行

【第1項第11号】

十一 ダムによつて貯留された流水が当該ダムの洪水吐きから異常に放流された事故

(1) 目的

平成14年に発電用ダムにおいて洪水吐きゲート誤作動（制御システムのソフトウェア不具合）による異常放流が発生し、第1号に規定する死傷事故や第3号に規定する公共の施設に著しく被害を与えるものではなかったものの、ダムについては、その異常放流が社会的に大きな影響をもたらす事故に拡大するおそれがあることに鑑み、ダムに限って、本号において報告を求めるものである。

(2) 語句・文章の解釈

「異常に放流された事故」：操作員の誤操作又は制御システムの不具合によるダムの洪水吐きゲートの誤作動を停止する操作がなされなかったことにより、例えばダムの操作に関する規程（河川法23条、47条）に反して、ダムによつて貯留された流水が放流された場合のことをいう。

(新設)

改正案	現 行
<p>(1) 目的</p> <p><u>電気工作物に係る社会的に影響を及ぼした事故については、技術的には単純な原因であったとしても、電気事業の公共性に鑑み、電気工作物に係る保安体制、管理運営体制等について、詳細に調査、検討し、再発防止策を講じる必要があることから、第1号から第12号までの事故に該当しない事故を対象として、報告を求めるものである。</u></p> <p>(2) 運用上の留意点</p> <p>① <u>「社会的に影響を及ぼした事故」は多様であり、かつ、その時の周囲の状況や社会的情勢によって、その評価も異なってくることに留意する必要がある。このため、どのような規模の事故を対象として報告を求めるかを一律に定めることは困難であるが、例えば以下の事故が挙げられる。この場合、原因にかかわらず、電気工作物の工事、維持、又は運用に係るものであれば、本号の事故の対象となり得る。</u></p> <p><u>イ 著しく長期的かつ広域的な自然災害等により、広範囲の地域に著しい影響を及ぼした事故</u></p> <p><u>ロ 電気工作物の工事中又は定期的な点検等の期間中に発生した公共の安全の確保上又は電力の安定供給の確保上特に重要な事項に係る事故</u></p> <p><u>ハ 多くの人が一度に集まるイベント（オリンピック、パラリンピック、サミット等）等における供給支障事故であって社会的に特に重大な影響を及ぼした事故</u></p>	

改正案	現 行
<p><u>ニ 一つ又は複数の事故が起因となって、多数の家屋等の施設又は工作物に著しい被害を与えた事故（この場合、事故を発生させた設置者自らの電気工作物は除く。）</u></p> <p><u>ホ 電気工作物の維持又は運用に係る一つ又は複数の要因が起因となって、道路や橋などの施設又は工作物を破損又は不通とするなど社会的な混乱や不安等を生じさせた事故</u></p> <p><u>ヘ 電気工作物で使用している油等が構外に排出され、又は、地下に浸透した場合（人の健康に係る被害を生ずるおそれがある場合に限る。規則第4条に掲げるものと重複する場合には、規則第4条に基づく届出をもって本号に基づく速報に代えることができる。）</u></p> <p><u>② 社会的に影響を及ぼした事故が発生したかどうかについては、比較的規模が大きく、原因も複雑である場合もあり、その立証が困難な場合が多い。また、その被害等も相当の時間を経過した後に判明する場合も多いことから、電気工作物設置者及び経済産業省は、何らかの被害等に関する情報が得られた場合には、積極的にその被害の状況や原因を調査し、これらの関係を時系列を含め、明確にしておくことが重要である。</u></p> <p><u>附 則（20120919商局第9号）</u> <u>電気関係報告規則第3条の運用について（内規）（平成16年4月22日付け平成16・03・26原院第8号）は廃止する。</u></p> <p><u>附 則（20160401 商局第1号）</u></p>	<p>（新設）</p>

改正案	現 行
<p>1 この規程は、平成28年4月1日から施行する。</p> <p>2 この規程の施行の日の前に発生を知った事故に係る運用については、なお従前の例による。ただし、この規程の施行の日の前に発生し、施行の日以降に電気関係報告規則（昭和40年通商産業省令第54号）第3条第1項第6号に掲げる発電支障事故に該当することとなった事故については、この限りでない。</p>	